

Title	日本における『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の出版：和刻本と図解本
Sub Title	The publication of Mao Shi Cao Mu Niao Shou Chong Yu Shu in Japan : a Japanese edition and an illustrated edition printed in Japan
Author	矢島, 明希子(Yajima, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2017
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.52 (2017.) ,p.87- 114
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20170000-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本における『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の出版

―和刻本と図解本

矢島 明希子

はじめに

に本書と思われる書名が現れるため、近年は三国・呉の陸機説が優勢である。『隋書』以降、正史の経籍志（藝文志）を確認すると次のような書名を見つけることができる。

『隋書』卷三十二・経籍志

毛詩草木蟲魚疏二卷 烏程令呉郡陸機撰

『旧唐書』卷四十六・経籍志上

毛詩草木鳥獸蟲魚疏二卷

『新唐書』卷五十七・藝文志一

陸機草木鳥獸蟲魚疏二卷

『宋史』卷二〇二・藝文志一

陸機草木鳥獸蟲魚疏二卷

筆者は以前、「陸氏毛詩草木鳥獸蟲魚疏の基礎的研究―篇目から見る各本の相違」と題して、日本国内に伝存する唐本の陸氏『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』（以下、本書あるいは陸疏）を調査し、その系統について整理した¹。本書は、名の通り毛詩に登場する動植物について解説した『詩経』の名物書である。ただ、書名や撰者名が一定せず、成立時期についても決定打はない。撰者および成立年代には、三国・呉の陸機（字元恪）説、三国・呉から晋の陸機（字士衡）説、唐の陸機説の三説ある。『隋書』

以上、異同はあるものの、『宋史』までは書名をたどることができ、書物としてまとまった体裁をとどめていたと考えられる。特に、唐代は孔穎達が『毛詩正義』に多く本書を引いており、『詩』を読む際の参考書として重用されていたことがうかがえる。しかし、四庫全書提要に「原本は久しく佚し、此の本何人の輯する所かを知らず。大抵詩正義中に従り録出す」とあり、その後散佚したと見られる。現存する最も早期の刊本は、元末明初の陶宗儀による叢書『重較說郭』所収本（刊行は明末清初³）であり、宋以前の形式・内容を知ることはいきない。現存する唐本について、前稿では次の八系統に分類した（詳細については前稿を参照）。

①説郭本（章斐然校）…重較說郭・唐宋叢書・続百川学海
②姚士麟校本…亦政堂鐫陳眉公普秘笈集・寶顏堂秘笈普集・塩
邑志林

③毛晋広要本…津逮秘書・学津討原

④趙佑校正本…白鷺書院刊本・聚学軒叢書

⑤石永齡校本…増訂漢魏叢書（乾隆五十七）・同（光緒二）・同
（光緒二十一）

⑥四庫全書本

⑦丁晏校本…頤志齋叢書・古経解彙函・増訂漢魏叢書（光緒二十）

⑧羅振玉校本（排印）

これら八種は、①説郭本を起点として校訂を加え、また『毛詩正義』などから佚文を増補して展開する。形式の点では、③毛晋広要本も重要な本である。①②が本文（疏文）のみであるのに対し、叢書『津逮秘書』に収録した本書について、毛晋は各篇の末尾に詳細な考証を附した。清代の刊本でこの形式に列するのは、④趙佑校正本、⑦丁晏校本、⑧羅振玉校本である。これらは①説郭本と③毛晋広要本の両者を基軸として校勘を加えており、毛晋の広要本は、清代の考証学者に大きな影響を与えたといえる。

では、日本において本書はどのように読まれたのだろうか。上述の通り、本邦でも本書は多種多様な唐本が伝存している。古くは、九世紀末の『日本国見在書目録』に「毛詩草木虫蔬二卷晋陸機撰」とある。「晋陸機」は本書の撰者として名前が挙がる人物の一人であり、三国時代の呉の名門出身で、呉が滅亡した後は西晋に仕えた陸士衡であろう。『日本国見在書目録』の書名は『隋書』に挙がる書名に近い。仮に、これが現行の陸

疏につながる本であるとすれば、本書は古くから日本に伝来していたということになる。

前稿では日本伝存唐本について報告したが、本論では日本で出版された陸疏について検討したい。伝存刊本について諸データベースや図書目録によつて調査を行うと、江戸時代に二種刊行されていることが判明した。まず一つは本文のみの和刻本『毛詩艸木鳥獸虫魚疏』（以下、和刻本）、もう一つは本文に解説と図を附した淵景山（在寛）注『陸氏草木鳥獸虫魚疏図解』（以下、陸疏図解本）である。以下、それぞれについて考察を加え、日本の陸疏出版について概観してみたい。それによつて、日本において本書がどのような人々によつて読まれ、どのような学問系統に位置づけられるのかを探るつもりである。

なお、断りを入れない限り、引用した原文の句読点は筆者によるものである。

一．和刻本『毛詩艸木鳥獸虫魚疏』について

まず、和刻本について見ていきたい。残念ながら、全国漢籍データベースや諸目録から得られた情報は少なく、今回所蔵が

判明し調査できた陸疏和刻本は国会図書館所蔵本（わ一二三／三一 以下、国会本）と東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本（狩二／一七九四／二 以下、狩野本）の二本のみであった。この二本は同版であるが、それぞれ非常に興味深い特徴を持つ本であるため、まず、各本の特徴について紹介し、和刻本のテキスト系統について検討する。

（一）国会図書館蔵本（わ一二三／三一）

毛詩艸木鳥獸虫魚疏二卷

和大 二冊

唐陸璣撰 松下見林點

元禄十一年（一六九八）大坂・毛利田庄太郎刊

淡茶色表紙（二六・五×一九・三糎）、左肩に子持梓刷題簽「毛詩艸木鳥獸虫魚疏（乾（坤））」を貼付（剝離部分を墨筆にて補写す）、右上に方形陽刻「伊藤／篤太／郎記」朱印を捺した切り紙を貼付す。

序・目録なし。

巻首題及び初行「毛詩艸木鳥獸虫魚疏卷上／（低十格）唐呉

郡 陸璣 著／（低三格）方秉蘭兮／蘭即蘭香艸也春秋傳曰刈蘭而卒。楚辭云紉秋蘭」

四周及辺（二〇・二×一四・三種）、無界、每半葉十行二十字、

読点・返点・送仮名・振仮名・連合符あり。眉上に校注あり

（有郭、行三字）。

版心、大黒口単黒魚尾、版心題「毛詩疏卷上（下）」

尾題後改張して跋文「毛詩艸木鳥獸蟲魚疏跋／國史經籍志曰毛詩艸木鳥獸蟲魚疏二卷陸璣著／聞名尚矣我邦浪速諸生檣村道菴家有舊藏之卷／書肆毛利田氏新寫之乞訓點于余余加訓點付之／以爲多識於鳥獸艸木名詩也其辯鳥獸艸木蟲魚／之形狀者璣之疏也以此言之則舍疏何以哉毛利／田氏遂鏤梓流布于世云／（低二格）元祿丁丑春二月中丁／（低十二格）松下見林跋」（半張）あり。

跋文張のウラに刊記「（低二格）元祿（戊寅）正月上浣日／（低六格）攝陽書肆（古本屋清左衛門／毛利田庄太郎）梓」あり。

刊記の後に下巻末尾四篇および唐本に有する四家詩伝授を補写（每半葉九行二十字、五張）。

行間に朱筆にて校合注書入あり。各篇句下に片仮名にて和名を記す（森立之筆）。また行間に藍筆にて校合注あり（森約

之筆、洪江抽斎校合の転写）。眉上に墨筆・藍筆にて注あり（森立之および約之筆）。

〔識語〕

（イ）卷首欄外（森約之筆）

「澠江道順所藏寫本 安政四年丁巳八朔校讎起業（傍らに「二日卒業」）源授庭森氏約之

右本每半葉九行之廿字、字数与此本同、表帙簽題亦書陸璣草木鳥獸蟲魚八字、而卷末有四家詩論、今寫抄付後。」（朱筆、楷書）

（ロ）下巻十二張オモテ（森約之筆、洪江抽斎跋文の転写）

「以毛詩正義（依盧宣旬本）校正畢。他日將依陸氏釋文及爾雅疏・左傳・礼記等正義、詩類書所引校正、未知果否。己亥六月朔抽斎平全善」（藍筆、楷書）

（ハ）同（森約之筆）

「右本文以此藍青校者、再寫澠江抽斎所校詩正義所引者也。并記彼跋言右方也。安政四丁巳八月二日夜三更鐫下卒業 森約之授庭」（藍筆、楷行書）

（ニ）下巻十二張ウラ（森立之筆）

「（墨筆）（安政二也）

(朱筆) 丁卯六月十九日一讀過、并漫録国名了。時在龍口館
中 源立之^二 (墨筆亀甲杵あり、楷行書)

(ホ) 同、藍筆にて孔疏より三条補写 (森約之筆)。

「是補遺亦如前跋語所言也 日東約之又識」 (藍筆、楷行書)

(ハ) 四家詩伝授末尾張オモテ (森約之筆)

「右詩家詩傳授四條、澁江抽斎所藏寫本毛詩陸疏末所付。今
寫之校比、且付家藏版本陸疏之後、若斯之寫因備實、校乃身
自也。安政四己八月八日授庭■居士源約之書」 (墨筆、楷
行書、■は判読不能)

各冊首右下に四周单边方形陽刻「森／氏」(森立之 朱印記、
同右上に四周单边方形陽刻「伊藤／篤太／郎記」朱印記あり。

書入れ・蔵書印からわかるように、国会本は江戸末から明治
初の考証学・本草学者である森立之^{たつゆき}・約之^{のりゆき}父子の旧蔵書である。
識語(二)によれば、まず、森立之(一八〇七—八五 号枳園)
が安政二年(一八五五)に該本を読了し、和名を注記したとい
う。「龍口」とは江戸の地名・辰口のこと、多紀氏の医学校・
躋寿館を指すと考えられる。当時、森立之は安政元年に躋寿館
の講師に任ぜられ、『医方心』校刊の助校を命じられており、

該本はそのような状況下において読まれたのであろう。その二
年後に、息子の約之が校注を加えている。

約之は号授庭、天保六年(一八三五)の生まれで、明治四年
(一八七二)に父の立之より早く、三十七歳の若さで没してい
る。約之が国会本に書き入れを行ったのは、安政四年(一八五
七)八月であることが識語からわかる。また、約之の識語(イ)
によると、国会本に施された藍筆の校注は渋江抽斎所蔵の写本
に附された校合注の転写と見られ、末尾に抽斎が没したのが
一八三九)の跋語を転写している(ロ)。渋江抽斎が没したのが
安政五年八月のことであるから、約之が抽斎蔵写本を借り出し
たのはちょうど没する一年前ということになる。

藍筆による校勘は全体にわたっており、渋江抽斎が『毛詩正
義』や『爾雅』などと校合した結果、かなりの異同があったこ
とが見て取れる。さらに、唐本では通常本書の末尾に『詩経』
の伝授系統を論じた「四家詩伝授」が附されているが、国会本
及び抽斎蔵写本にはそれが附されていなかったことから、これ
を補写したという(イ、ハ)。

約之が参照した抽斎蔵写本がいかなる本に基づくものなのか、
また約之が「四家詩伝授」をいかなる本から転写したのかにつ

いて、正確なところは特定できない。これらはともに九行二十字の体式を探ることから、刊本の転写本とすれば、同じ版式の唐本で年代的に可能性のあるものには、説郭本・趙佑校正本（白鷺洲書院刊）・増訂漢魏叢書本（清乾隆五十七年・光緒二十年）がある。⁶しかし、残念ながら、洪江抽斎の蔵書は森氏父子が貸借したまま戻らなかったものや、子孫・親類によつて売却されるなどしてかなりの点数が散佚したとされ、行方不明のものが多く、国会本校勘の底本になつたはずの抽斎蔵写本も現在見出せていない。

（二）東北大学附属図書館狩野文庫蔵本（狩二／一七九四／二）

国会本と同版

行間および欄外に墨筆にて書入れあり（狩野亨吉筆）。

一冊目首に四周双辺長方形陽刻「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ以テ購入セル文學博士ノ狩野亨吉氏舊藏書」朱印記あり。

狩野本は、印面からして国会本とほぼ同時期の印行、強いていえばやや遅れるものと見られる。

書入れの筆跡は、狩野文庫の他の写本や書入れ本と比較して狩野亨吉（一八六五―一九四二）のものと推測される。狩野の蔵書は仙台出身の貴族院議員荒井泰治を通じて東北帝国大学附属図書館に売却された。⁷売却は、大正元年（一九一二）から昭和十八年（一九四三）まで、和漢籍を中心に四回にわたつて行われ、印記からして陸疏の狩野本もこのうちの一本と考えられる。¹⁰

本書への書入れの内容は、毛伝や朱注など伝統的な詩注との考証や、和名との同定という経学・名物学的な手法や、その動植物の植生や生態という自然科学的視点だけでなく、和歌など日本文学の中にどのように現れるのかを引用する項もあり、自然科学・人文科学の枠を超えた豊かな内容を持つ。内容の詳細については、別の機会に考察したい。

（三）著者と板元

では、元禄十一年の刊記を持つ陸疏和刻本の底本はいったい何本であろうか。繰り返しになるが、松下見林の跋文に出版の経緯が記されているので再掲する（原本の訓点・送り仮名に従い訓読した。句読点は筆者）。

毛詩艸木鳥獸蟲魚疏跋

國史經籍志ニ曰ク、毛詩艸木鳥獸蟲魚疏二卷、陸璣著ス。名ヲ聞クコト尚シ。我ガ邦ノ浪速ノ諸生檣村道菴ノ家ニ舊藏ノ卷有リ、書肆毛利田氏之ヲ新寫シ、余ニ訓點ヲ乞。余訓點ヲ加之ニ付シテ以爲ク多ク鳥獸艸木ノ名ヲ識ルハ詩也。其ノ鳥獸艸木蟲魚ノ形狀ヲ辯スルハ、璣ガ疏也。此ヲ以テ之ヲ言フトキハ則疏ヲ舍テテ何ヲ以テセン哉。毛利田氏遂ニ梓二鏤テ世ニ流布スト云フ。元祿丁丑春二月中丁 松下見林跋

まず、跋文の撰者であり、本書に訓点を加えた松下見林（一六三七—一七〇三）は、名を慶あるいは秀明、字を諸生という。大坂の医家に生まれ、医学・儒学・国史を修めた在野の学者であり、蔵書家でもあった。本書への加点は、見林の後期の業績である。

刊記には二軒の書肆が名を連ねているが、跋文からして主導的な版元は毛利田（森田）庄太郎であろう。毛利田庄太郎も古本屋清左衛門とともに大坂の書肆である。毛利田庄太郎は、西鶴と提携するなど大坂出版界の初期から活動し、『異称日本伝』や『前王廟陵記』といった見林の著作を出版している。羽生紀

子氏は、松下見林や貝原益軒と毛利田庄太郎など上方の書肆の結びつきについて、儒者・医者の方のグループが協調性を持ち、専門知識に固執せず啓蒙性・実用性を重視して積極的な出版メディアに関わりとうとする知識人と、新たな発想の下に活動しようという大坂の新興書肆サークルとの提携によって、一つの大きなサークルが形成されていたという¹¹。陸疏和刻本刊行に関与した二軒も、そうした書肆サークルの一員であったと考えられる。また、羽生氏は見林の著作出版の傾向について、寛文期は漢籍など古典的テキストの内容を人々に示すことを主眼とし、主に京都の書物問屋から刊行されているのに対し、天和期以降は大坂の書肆を中心に自己の学問成果を出版することへと変化していると述べる¹²。ただ、陸疏への加点は、天和期以降の出版でありながら、見林独自の注釈は見えず、古典的テキストの提出にとどまる。また、これより少し遡る元祿六年（一六九三）には朱熹撰・松下見林校点『詩經集註』十五巻が京都の野田庄右衛門から刊行されている。これらのことを踏まえると、出版物の傾向が古典的テキストから自己の学問成果に変化したとされる後期においてもなお、見林は書肆との関係の中で古典的テキストの出版に関わっていたことがうかがえる¹³。

(四) テキストの系統

跋文によれば、陸疏和刻本の底本は大坂の檜村道菴旧藏本とあるが、刊写の別など詳細は記されていない。そのため、テキストの系統についていくつかの可能性を検討したい。

まず、檜村本が写本であった場合には多くの可能性が想定される。日本国内で転写されたとすれば、その祖本が『日本国見在書目録』に見える陸疏にまで遡る可能性がないとはいえない。また、中国写本である場合には、刊本を写したもののなか、それ以前からの独自の写本系統なのか様々な可能性が考えられるが、いずれにしても手がかりがなく、想像の域を出ない。

次に、底本が刊本であるとすれば、管見の限り見林加 points の陸疏和刻本以前に刊行された陸疏の和刻本が見出せないため、ひとまず、それは唐山の刊本であったと仮定したい。その場合、

元禄十一年（一六九八）以前に刊行された唐本は、明末清初の

①説郭本（唐宋叢書・続百川学海を含む）、②姚士麟校本（亦政堂鐫陳眉公普秘笈集・塩邑志林）、③毛晋広要本（津逮秘書）に絞られる。これら叢書類の伝来について、元禄十二年に刊行された一色時棟編『西洞』（慶應義塾大学蔵 二二五／一九四）

には『説郭』・『唐宋叢書』・『続百川学海』・『津逮秘書』の書名が記録されている。そのうち『津逮秘書』の細目に「陸氏草木蟲魚疏」、『続百川学海』に「毛詩疏 陸機」、『正説郭』に「毛詩草木鳥獸蟲魚疏○陸機」とあり、陸疏に同定されうる書名が見える。『西洞』は一色時棟家蔵の唐本叢書目録であり、元禄十二年の刊行とはいえ、それ以前にこれらの書物が伝来していたと考えるのが妥当であろう¹⁵。また、輸入された書物は転写されて普及することから、檜村家蔵本がこのような唐本の転写本であった可能性は十分に考えられよう。

では、和刻本と唐本の内容はどのような関係にあるのだろうか。筆者は前稿で、各本の篇目の比較によって唐本を比較・整理した。本論でもこの方法を用いて唐本と和刻本との比較を試みたい。対象とするのは次の四種である。

(A) 説郭本

(B) 亦政堂鐫陳眉公普秘笈集本（以下、普秘笈本）

(C) 塩邑志林本

(D) 毛晋広要本（津逮秘書）

これら四種の関係について、前稿で整理した結果を簡単に述べれば、このうち、(A) (B) はともに撰者を「唐陸機」とす

ること、篇題・篇数（一三三篇）・配列が一致することから同系統に位置づけられる。（C）は（B）と同時期の同地域の編纂であり、ともに姚士麟校とされているが、篇題が一致しない。

さらに、（A）（B）（D）が撰者を唐の陸璣の撰する一方で、（C）は三国時代の著作として収録していることから、（C）は他の三種とは別系統であり、撰者を「唐陸璣」とする和刻本との比較対象から除外してよいと考える。残る（A）（B）（D）のうち、（D）もまた別系統のテキストを持つ。「はじめに」で述べたように、（D）は毛晋の考証が強く反映されており、（A）（B）と比べて一篇多い一三三篇、「坊刻」「舊本」に対して篇題の差替えや、『詩経』の詩句に則して篇題を補完するなどの特徴が見られる。とすると、可能性があるのは（A）（B）説郭・普秘笈本系か、（D）毛晋広要本かの二系統に大別できる。

そこで、和刻本の篇目を比較してみると【篇目比較表】参照、篇数は一三三篇、配列も（A）（B）説郭・普秘笈本系に一致する。魚部の「魚麗于留魴鱧」と虫部の「螟蛉有子蜾蠃負之」は（D）広要本と一致するものの、この一致が広要本の影響を受けたことによるかどうかは不明。篇目の比較からすれば、説郭・普秘笈本系に近い構成であるといえよう。

さらに、和刻本と説郭・普秘笈本、広要本の本文を比較してみたい。第一篇の「方秉蘭兮」を例として挙げる。

〈和刻本〉

蘭卽蘭香艸也。春秋傳曰、刈蘭而卒。楚辭曰、紉秋蘭。孔子曰、蘭當爲王者。香艸皆是也。其莖葉似藥草澤蘭、但廣而長節、節中赤、高四五尺。漢諸池苑及許昌宮中皆種之。可著粉中、故天子賜諸侯范蘭、藏衣著書中辟白魚也。

〈説郭・普秘笈本〉

蘭卽蘭香草也。春秋傳曰、刈蘭而卒。楚辭曰、紉秋蘭。孔子曰、蘭當爲王者。香草皆是也。其莖葉似藥草澤蘭、但廣而長節、節中赤、高四五尺。漢諸池苑及許昌宮中皆種之。可著粉中、故天子賜諸侯范蘭、藏衣著書中辟白魚也。

〈広要本〉

蘭卽蘭香草也。春秋傳曰、刈蘭而卒。楚辭曰、紉秋蘭。以爲佩。孔子曰、蘭當爲王者。香草皆是也。其莖葉似藥草澤蘭、但廣而長節、節中赤、高四五尺。漢諸池苑及許昌宮中

皆種之。可著粉中、故天子賜諸侯蒞蘭、藏衣著書中辟白魚也。

和刻本と説郭・普秘笈本は「艸」と「草」など字体の違いこそあれ、内容は完全に一致する。しかし、広要本は「以爲佩」(波線部)の句が多い。この比較からも、和刻本が説郭・普秘笈本により近いことがうかがえる。

ただし、異体字や誤字と思われる部分を除いて、和刻本と説郭・普秘笈本が完全に一致するというわけではない。例として草部の「言采其竈」を挙げる。

〈和刻本〉

竈今藥艸貝母也。其葉如栝樓而細小。其子在根下如芋子、正白四方連累相著、有分解是也。

〈説郭・普秘笈本〉

竈今藥草貝母也。其葉如栝樓而細小、其子在根下如芋子、正白四方連累相著、有分解也。

和刻本は、説郭・普秘笈本と比べて「是也」(波線部)の二

字が多いのである。同様の例は草部の「薄言采芒」にも見られる。とはいえ、本文の内容に大きな影響を及ぼす相違とはいえない。

和刻本の底本となった檜村家蔵本がいかなる本であったか確実には特定できない以上、和刻本の祖本を導き出すことは困難である。しかし、以上のように、篇題や内容を比較してみると、小さな違いはあるものの、和刻本は説郭普秘笈本に極めて近い系統にあることがうかがえよう。

陸疏は、中国では宋代までの目録にはその名を見出すことができるが、その後再び一書としてまとまった体裁を取るのには、明末清初の叢書類の刊行まで俟たねばならない。日本でも、九世紀末の『日本国見在書目録』以降は空白である。それが、中国における叢書の刊行からやや遅れた元禄年間に上方の書肆によって見出され、見林の加点を経てようやく和刻本が刊行された。中国における叢書の刊行と日本における本書の刊行との間にどのような関係性があるのか、現段階では説明するに至っておらず、今後の課題としたい。

【篇目比較表】 他書と篇題に異同がある場合は太枠で示した。

		説郛（陶宗儀）	陳眉公普秘笈 （姚士麟等校）	鹽邑志林	廣要（毛晉參）	和刻本
上卷	草	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮	方秉蘭兮
		采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢	采采芣苢
		言采其蕝	言采其蕝	言采其蕝	言采其蕝	言采其蕝
		谷中有蕓	谷中有蕓	谷中有蕓	中谷有蕓	谷中有蕓
		集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞
		言采其賁	言采其賁	言采其賁	言采其賁	言采其賁
		薦與女蘿	薦與女蘿	薦與女蘿	薦與女蘿	薦與女蘿
		有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷	有蒲與荷
		參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜	參差荇菜
		于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋
		于以采藻	于以采藻	于以采藻	于以采藻	于以采藻
		言采其芣	言采其芣	言采其芣	言采其芣	言采其芣
		蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼	蒹葭蒼蒼
		萋竹漪漪	萋竹漪漪	萋竹漪漪	萋竹漪漪	萋竹漪漪
		苕之華	苕之華	苕之華	苕之華	苕之華
		隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍	隰有游龍
		食野之苹	食野之苹	食野之苹	食野之苹	食野之苹
		于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋	于以采蘋
		菁菁者莪	菁菁者莪	青青者莪	菁菁者莪	菁菁者莪
		言刈其蕞	言刈其蕞	言刈其蕞	言刈其蕞	言刈其蕞
		食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿	食野之蒿
					食野之芩	
		采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳	采采卷耳
		贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥	贈之以勺藥
		采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲	采葑采菲
		言采其蕝	言采其蕝	言采其蕝	言采其蕝	言采其蕝
		言采其薇	言采其薇	言采其薇	言采其薇	言采其薇
		言采其藟	言采其藟	言采其藟	言采其藟	言采其藟
		薄言采芣	薄言采芣	薄言采芣	薄言采芣	薄言采芣
		誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦	誰謂荼苦
		匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉	匏有苦葉
		邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕	邛有旨苕
		言采其莫	言采其莫	言采其莫	言采其莫	言采其莫
		莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟	莫莫葛藟
		視爾如莪	視爾如莪	視爾如莪	視爾如莪	視爾如莪
		北山有萊	北山有萊	北山有萊	北山有萊	北山有萊
		取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂	取蕭祭脂
		白茅包之	白茅包之	白茅包之	白茅包之	白茅包之
		可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵	可以漚紵
		邛有旨鷦	邛有旨鷦	邛有旨鷦	邛有旨鷦	邛有旨鷦
		南山有臺	南山有臺	南山有臺	南山有臺	南山有臺
		茹蘆在阪	茹蘆在阪	茹蘆在阪	茹蘆其阪	茹蘆在阪
		白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮	白華菅兮
		蒺藜于野	蒺藜于野	蒺藜于野	蒺藜于野	蒺藜于野

		說郛（陶宗儀）	陳眉公普秘笈 （姚士麟等校）	鹽邑志林	廣要（毛晉參）	和刻本
		匪莪伊蔚	匪莪伊蔚	匪莪伊蔚	匪莪伊蔚	匪莪伊蔚
		隰有萋楚	隰有萋楚	隰有萋楚	隰有萋楚	隰有萋楚
		芄蘭之支	芄蘭之支	芄蘭之支	芄蘭之女	芄蘭之支
		浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂	浸彼苞稂
		言采其蓬	言采其蓬	言采其蓬	言采其蓬	言采其蓬
		梓椅梧桐	梓椅梧桐	梓椅梧桐	梓椅梧桐	梓椅梧桐
		有條有梅	有條有梅	有條有梅	有條有梅	有條有梅
		北山有栝	北山有栝	北山有栝	北山有栝	北山有栝
		常棣	常棣	常棣	常棣	常棣
		爰有樹檀	爰有樹檀	園有樹檀	爰有樹檀	爰有樹檀
		柞械拔矣	柞械拔矣	柞械拔矣	柞械拔矣	柞械拔矣
		隰有杞夷	隰有杞夷	隰有杞夷	隰有杞桷	隰有杞夷
		山有杻	山有杻	山有杻	隰有杻	山有杻
		其灌其柵	其灌其柵	其灌其柵	其灌其柵	其灌其柵
		其櫟其楮	其櫟其楮	其櫟其楮	其櫟其楮	其櫟其楮
		山有樞	山有樞	山有樞	山有樞	山有樞
		山有栲	山有栲	山有栲	山有栲	山有栲
		集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩	集于苞栩
		無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪	無浸穫薪
		集于苞杞	集于苞杞	集于苞杞	無折我樹杞	集于苞杞
		其下維穀	其下維穀	其下維穀	其下維穀	其下維穀
		榛楸濟濟	榛楸濟濟	榛楸濟濟	榛楸濟濟	榛楸濟濟
		揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲	揚之水不流束蒲
		蔽芾其樗	蔽芾其樗	蔽芾其樗	蔽芾其樗	蔽芾其樗
		椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實	椒聊之實
		山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟	山有苞櫟
		食鬱及薺	食鬱及薺	食鬱及薺	六月食鬱及薺	食鬱及薺
	木	樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗	樹之榛栗
		標有梅	標有梅	標有梅	標有梅	標有梅
		蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠	蔽芾甘棠
		唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華	唐棣之華
		隰有樹檍	隰有樹檍	隰有樹檍	隰有樹檍	隰有樹檍
		北山有枸	北山有枸	北山有枸	南山有枸	北山有枸
		顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華	顏如舜華
		采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗	采荼薪樗
		唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲	唯筍及蒲
下卷	鳥	鳳皇于飛	鳳皇于飛	鳳皇于飛	鳳皇于飛	鳳皇于飛
		鸛鳴于九皋	鸛鳴于九皋	鸛鳴于九皋	鸛鳴于九皋	鸛鳴于九皋
		鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤	鸛鳴于垤
		鴝彼晨風	鴝彼晨風	鴝彼晨風	鴝彼晨風	鴝彼晨風
		鴝彼飛隼	鴝彼飛隼	鴝彼飛隼	鴝彼飛隼	鴝彼飛隼
		有集維鷖	有集維鷖	有集維鷖	有集維鷖	有集維鷖
		關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩	關關雎鳩
		鳴鳩在桑	鳴鳩在桑	鳴鳩在桑	鳴鳩在桑	鳴鳩在桑
		宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩	宛彼鳴鳩

		說郛（陶宗儀）	陳眉公普秘笈 （姚士麟等校）	鹽邑志林	廣要（毛晉參）	和刻本
		翩翩者雛	翩翩者雛	翩翩者雛	翩翩者雛	翩翩者雛
		脊令在原	脊令在原	脊令在原	脊令在原	脊令在原
		黃鳥于飛	黃鳥于飛	黃鳥于飛	黃鳥于飛	黃鳥于飛
		鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣鷓鴣	鷓鴣
		交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈	交交桑扈
		肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲	肇允彼桃蟲
		振鷺于飛	振鷺于飛	振鷺于飛	值其鷺羽	振鷺于飛
		維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁	維鵜在梁
		鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚	鴻飛遵渚
		弋鳬與雁	弋鳬與雁	弋鳬與雁	弋鳬與雁	弋鳬與雁
		肅肅雉羽	肅肅雉羽	肅肅雉羽	肅肅雉羽	肅肅雉羽
		翩彼飛鴉	翩彼飛鴉	翩彼飛鴉	翩彼飛鴉	翩彼飛鴉
		流離之子	流離之子	流離之子	流離之子	流離之子
	獸	麟之趾	麟之趾	麟之趾	麟之趾	麟之趾
		于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞	于嗟乎騶虞
		有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆	有熊有羆
		羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾	羔裘豹飾
		獻其貔皮	獻其貔皮	皮貔獻其	獻其貔皮	獻其貔皮
		狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡	狼跋其胡
		教猱升木	教猱升木	教猱升木	母教猱升木	教猱升木
	魚	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪	有鱣有鮪
		維魴及鯈	維魴及鯈	維魴及鯈	維魴及鯈	維魴及鯈
		魚麗于罟魴鯉	魚麗于罟魴鯉	魚麗于罟魴鯉	魚麗于罟魴鯉	魚麗于罟魴鯉
		九設之魚鱗魴	九設之魚鱗魴	九設之魚鱗魴	九設之魚鱗魴	九設之魚鱗魴
		魚麗于罟鱣鯨	魚麗于罟鱣鯨	魚麗于罟鱣鯨	魚麗于罟鱣鯨	魚麗于罟鱣鯨
		象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服	象弭魚服
		鼙鼓逢逢	鼙鼓逢逢	鼙鼓逢逢	鼙鼓逢逢	鼙鼓逢逢
		成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦	成是貝錦
	蟲	螽斯	螽斯	螽斯	螽斯	螽斯
		嘒嘒草蟲	嘒嘒草蟲	嘒嘒草蟲	嘒嘒草蟲	嘒嘒草蟲
		趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽	趯趯阜螽
		莎雞振羽	莎雞振羽	莎雞振羽	六月莎雞振羽	莎雞振羽
		去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊	去其螟螣及其蟊賊
		螟蛉有子	螟蛉有子	螟蛉有子	螟蛉有子螟蠶負之	螟蛉有子螟蠶負之
		蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂	蟋蟀在堂
		蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽	蜉蝣之羽
		如蜩如螳	如蜩如螳	如蜩如螳	如蜩如螳	如蜩如螳
		伊威在室	伊威在室	伊威在室	伊威在室	伊威在室
		蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶	蠨蛸在戶
		碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠	碩鼠
		如鬼如蜮	如鬼如蜮	如鬼如蜮	爲鬼爲蜮	如鬼如蜮
		卷髮如蜚	卷髮如蜚	卷髮如蜚	卷髮如蜚	卷髮如蜚
		胡為虺蜴	胡為虺蜴	胡為虺蜴	胡為虺蜴	胡為虺蜴
		領如蝥蟥	領如蝥蟥	領如蝥蟥	領如蝥蟥	領如蝥蟥

二『陸氏草木鳥獸虫魚疏図解』について

次に陸疏図解本について検討する。経書の図解本は、書物の中に登場する動植物や諸般の文物について、文章だけでは伝わりにくい物の姿形を理解するために作成された参考資料である。『詩経』のほかにも、三礼（『礼記』『周礼』『儀礼』）関係には、礼に適った装束や器物を知るために図解本が制作された。これら中国で出版された図解本は日本でも翻刻され、多くの学者がそこに描かれた古典中の文物を参照したものと推測される。管見の限り、陸疏について中国で図解本が刊行されたという記録は見当たらないが、日本では淵景山（在寛）が解説を附し『陸氏草木鳥獸虫魚疏図解』と題して図解本が刊行されている。この陸疏図解本の特徴について、中国の『詩経』図解本や、江戸時代のその他の『詩経』図解本と比較して検討していきたい。

（一）中国における『詩経』の図解本

まず、中国における『詩経』の図解本について、原田信氏の一連の研究に沿って確認する。

原田氏が早期の図解本として挙げるのが、宋代の「毛詩正變指南図」（宋紹興年間昌元楊甲編纂『六経図』所収）と「毛詩挙要図」（宋紹熙年間建陽刊『纂図互注毛詩』所収）である。前者は『四庫全書』に収録され、後者は明清に編纂された図解本の底本である「六経図碑」や『詩経大全』に転用されたことで、後世まで継承されたという。また、宋代には鄭樵や朱熹が考証において図解を重視したことなど、読書法の変化について触れ、さらに実際のな視点として科挙の参考書としての側面を指摘する。¹⁷

また、原田氏が図解本の各項目を整理したところ、草木鳥獸に関する内容が欠けているか、あっても名前のみであったのではないかとし、これについて原田氏は、「他の項目ほど重視されなかったのだろう」と述べる。¹⁸元代以降に編纂された図解本には、朱熹の詩説などの影響を受けた図解が収録され、明代には永樂帝勅撰の『五経大全』（附「詩経大全図」）が編纂された。これらは先行刊本の図を採集して成立しており、その転用の過程で各図の由来が曖昧になってしまっているという。¹⁹『五経大全』中の「詩経大全図」は全国に広く普及し、日本でも翻刻された。清代においても科挙のテキストとして刊行が続き、影響力の大

さい図解本である。²⁰⁾

原田氏も指摘するように、「詩經大全図」には草木鳥獸の図は収録されておらず、清代の徐鼎『毛詩名物図説』（以下、徐鼎図説）が宋以降の図解本の中では唯一動植物の図を描いているが、『図説』は明代までの図解本との関連性が見いだしにくいという。²¹⁾つまり、清代までの『詩經』の図解本において、草木鳥獸の占める比重は極めて低かったといえる。

『論語』卷十七・陽貨篇「子曰、小子何ぞ夫の詩を學ぶこと莫らんや……多く鳥獸草木の名を識る」²²⁾は、名物学を論ずる際に必ず引かれる一説である。ここでは、『詩經』を学ぶ重要性の一つに草木鳥獸の名をよく知ることが挙げられている。それにもかかわらず、『詩經』図解本において、草木鳥獸の比重が低いのはなぜだろうか。筆者は、日本で刊行された『詩經』の図解本に、それを解く鍵があるのではないかと考えている。本論では、『詩經』の草木鳥獸に特化した図解本である『陸氏草木鳥獸虫魚疏図解』と、後に中国で影印され、日中で影響力を持った『毛詩品物図攷』によって考えてみたい。²³⁾

(二) 『陸氏草木鳥獸虫魚疏図解』

『陸氏草木鳥獸虫魚疏図解』（以下、陸疏図解本）がどのような本であるのか、まず、書誌を以下に示す。²⁴⁾

○慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本（坦堂文庫 ホ一三三／二六二／五）

陸氏草木鳥獸虫魚疏四卷 附錄一卷 和大 五冊

〔唐〕〔陸機〕撰 淵〔景山〕（在寛）注

安永八年（一七七九） 江戸…須原屋茂兵衛刊

浅葱色蜀江錦文空押表紙（二十七・二×十八・二糎）、左肩に子持梓刷題簽「〔毛／詩〕 陸氏草木疏圖解 幾」を貼付す。

「詩疏圖解序」（安永七年、淵在寛）

「卷之一目録」各巻頭に目録あり。

巻首題及び初行「陸氏草木鳥獸虫魚疏圖解卷之一」（低九格）

東都 淵在寛 述／（低三格）方秉蘭兮／蘭即蘭香艸也春

秋傳曰刈蘭而卒楚辭云紉秋蘭以爲佩孔子曰蘭當爲王者」

单辺（二十・三×十三・六糎）、各篇ごとに界線あり。毎半葉十九行三十字前後。

本文…漢文、返点・送仮名あり。

淵注…底一格、和文（漢字カナ交じり）。

概ね各項に図を附す。

版心、白口無魚尾、版心題「詩疏」。

卷四尾題前に跋文「右詩疏ハ呉ノ太子中庶子烏程令陸璣カ作ナリトモ云ヒ唐ノ呉郡ノ陸璣カ作ナリトモ云フ陳氏辨シテ其書爾雅郭璞注ヲ引ク時ハノ郭ヨリ後ノ人ナルヘシ晋ノ代ノ人ナラズ諸書誤テ璣ヲ機ニノ作ル機字^ナハ士衡晋ノ人ナリ此ノ書ハ唐人陸璣字^ナ元恪ガノ撰フ所ニ疑ヒナシト明ノ毛晋云ヘリ」あり。

卷四の後に「陸氏艸木疏圖解附録」服飾・器物等の図解を附す。附録末張ウラに刊記「（大字）齊新甫藏／安永八亥正月／（低一格）東都書肆（〔日本橋通一丁目〕／須原屋茂兵衛）」あり。

陸疏図解本は和刻本に比べると伝本が多い。筆者が調査した伝本は、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵の二本（ホ一二三／二六二／五、ヤ一二三・三／ト二二／五）、国会図書館蔵の二本（特一／二〇三、一四二／二二）、国立公文書館蔵本（一九六／一一六）、静嘉堂文庫蔵本（三八／一三）である。これ

らの本文は全て同版であるが、刊記は次の三種が存在することが判明した。

①斯道文庫蔵本（ホ一二三／二六二／五）・国会図書館蔵本（特一／二〇三）

齊新甫藏

安永八亥正月

日本橋通一丁目

東都書肆

須原屋茂兵衛

②斯道文庫蔵本（ヤ一二三・三／ト二二／五）

齊新甫藏

安永八亥正月

大坂心齋橋筋安堂寺町

大野木市兵衛

日本橋通一丁目

東都書肆

須原屋茂兵衛

③国会図書館蔵本（一四二／二二）・国立公文書館蔵本・静嘉

堂文庫藏本

安永八亥正月 日本橋通二丁目

須原屋茂兵衛

五條高倉東江入町

京都書肆 北村四郎兵衛

三種は印面から判断して、①須原屋単独↓②大野木・須原屋↓③須原屋・北村の順に印行されたものと見られる。三種の刊記から、本書の刊行について版權所有者や書肆の關係に変化があつたことがうかがえるが、本論ではこれ以上踏み込まない。

注者は江戸の淵在寛とある。在寛は名で、号を景山というが、伝記等が伝わっておらず詳細は不明。

次に、陸疏図解の内容について見てみよう。卷一草部冒頭の「方秉蘭兮」を挙げる。

蘭卽蘭香草也。春秋傳曰、刈蘭而卒。楚辭曰、紉秋蘭。以爲佩。孔子曰、蘭當爲王者。香草皆是也。其莖葉似藥草澤蘭、但廣而長節、節中赤、高四五尺。漢諸池苑及許昌宮中皆種之。可著粉中、故天子賜諸侯蒔蘭、藏衣著書中辟白魚也。

蘭ニ眞蘭幽蘭アリ。詩經楚辭ナドニ詠スルハ、眞蘭ナリ。和名フシバカマ、又アララギト云ヒ、眞蘭ト澤蘭ハ一類二種ナリ。俱ニ水旁下湿ノ処ニ生ス。宿根ヨリ苗ヲ生シ、叢ヲ成ス。莖ムラサキニ枝シロク、節アカク、葉ミドリニ葉節ニ對シテ生ス。細齒アリ但、莖マロク、節ナガクシテ葉光リ、岐アルモノヲ蘭トシ、莖スコシク方ニ節ミジカクシテ、葉ニ毛アルモノハ澤蘭トス。本艸綱目芳草ノ類ノ蘭草ノ集解ニミヘタル時珍ノ説ナリ。蘭ハ香バシキモノナルユヘ、香イ袋ニ入レ、又書物ノアイダニヲケバ虫ヲサクト云ヘリ。コノ方ニテモ筑前ナドニハアルヨシヲ記セリ。今時花ヲ賞玩スルモノハ幽蘭ニテ眞蘭ニハアラズ。

陸疏の本文は、序文に「竊かに唐陸璣の詩疏を取りて焉に加え、已に明毛晉の説焉に附せり。諸本艸を以て此に注し圖書國字を以て之を解し、聊か童蒙の求めを塞がんと爲す耳也²⁵」とあり、陸疏図解本の底本が毛晉広要本であることが明言されている。跋文でも撰者の陸璣について毛晉の説を引いており、毛晉広要本の影響を強く受けていることは明らかである。陸疏図解

本は、毛晋広要本の一三三篇に各部補足し、草木鳥獸虫魚総じて一九九篇から成る。淵注の内容は、対象となる動植物の名称や形状について述べ、諸文献を引用してその説を紹介し、日本における生息地や風習などについて述べる。図解の名の通り、紙面の下方に図を附す。

篇目によって内容に多寡があるが、ほとんどの篇で和漢の書物が引用される。その引書は、大きく分けて五つに分類できよう²⁶（波線は国書）。

(Ⅰ) 『詩経』注釈書：毛伝（別称：伝・毛萇）、鄭箋、正義、孔疏（詩疏）、朱注、韓詩〔外伝〕、呂巖諸家

(Ⅱ) 本草書：本草綱目（本草、自珍）、大和本草（貝原翁）、本草諸書

(Ⅲ) 辞書・百科全書類²⁷（自然誌を含む）：爾雅（郭璞注、邢昺疏を含む）、説文、釈名、埤雅（陸佃）、博雅、爾雅翼、古今注、竹譜、禽經、博物志、通志略（昆虫草木略）、諸韻書、和名抄、多識編、寺島子（和漢）三才図会、〔詩経〕名物弁解（弁解）

(Ⅳ) その他典籍（史書・思想書など）：尚書（禹貢）、礼記（曲礼）、大戴礼、左伝、国語、漢書、水経注、莊子、淮南子、

楚詞、楊升庵文集、名山記

(Ⅴ) 毛晋広要

陸疏図解本の一九九篇中、各類の書物を引く篇の延べ数を出す次の表のようになる。²⁸

(Ⅰ) 『詩経』注釈書	(Ⅱ) 本草書	(Ⅲ) 辞書・百科全書	(Ⅳ) その他典籍	(Ⅴ) 陸疏・広要
三四	一四〇	五九	一七	二六

この表から、(Ⅱ) 本草書からの引用が圧倒的に多いことが分かる。さらにいえば、本草書を引く篇のうち、本草書のみで解説されている篇は、一九九篇中八十三篇に及び、補篇のほとんどが『本草綱目』に拠っている。そして、次に多いのが(Ⅲ) 辞書・百科全書である。本草書に比べると引用篇数は少ないが、書名が明らかな引書の種類は最も多く、和漢両方の書物を参照していることがうかがえる。(Ⅰ) 『詩経』注釈書は、古注の毛伝・鄭箋と、新注である朱注の割合に偏りは見られない（毛・鄭二十二、朱注十九）。また、(Ⅴ) 毛晋の説を紹介するのも淵注の特徴である。引書から見れば、淵注は(Ⅱ) 本草書と(Ⅲ) 辞書・百科全書を主体として構成される。そして、(Ⅱ) 本草書の『本草綱目』や『大和本草』は薬学の書であると同時に、

自然物に関する知識を集積した博物学の書としての性格が強い書物でもある。³⁰特に、『大和本草』は貝原益軒が実際に観察した具体的知識に基づいており、これによって上野益三氏は「その内容の大部分は見事な博物誌をなす」と述べ、近代科学としての博物学の第一歩であると評価している。³¹淵注には益軒（大和本草・貝原翁）によると明示された篇が三十篇あり、陸疏図解本にも日本における初期の博物学が反映されていると考えられる。つまり、淵注は伝統的な経学の立場からアプローチした注釈書というより、本草学や博物学的な観点からアプローチした注釈書といえよう。

また、本書に付された図について、確認できた限りでは、王圻編『三才図会』・寺島良安編『和漢三才図会』・稻生若水新校正『本草綱目』附図と一致するものが多く（次頁【陸疏図解本と他書の附図】に一部の例を挙げる）、³²これら本草書や百科全書の附図から転用したものと考えるのが妥当であろう。³³このことから、陸疏図解本の内容は本草書や百科全書の知識を集約して成ったことがうかがえる。

先に、筆者は中国の『詩経』図解本はなぜ草木鳥獸に関する内容が欠けているのかを問題にした。日本で刊行された陸疏図

解本は、その欠けた項目を補う内容を持つ。さらに陸疏図解本は、従来の『詩経』図解本が提供してきた服飾や器物の図を附録としており、³⁴却って日本の陸疏図解本の方が全ての項目を備えているといえる。また、中国の『詩経』図解本と同様、他書から図を転用するという方法を探っているが、採集元は『詩経』の図解本ではなく、多くは本草書や百科全書の図から転用したものと見られる。ということは、中国の図解本における草木鳥獸に関する内容は、すでに発達していた本草書や百科全書の図解で補うことができ、³⁵『詩経』の注釈書としては省略可能な領域だったと考えられないだろうか。この問題についてはさらなる検討を要する。

（三）『毛詩品物図攷』

では、陸疏図解本同様、草木鳥獸を中心とした『詩経』図解本である『毛詩品物図攷』と比較してみたい。書誌情報は次の通りである。

○慶應義塾大学蔵本（田中文庫 一〇〇五／三二五／三）

【陸疏図解 陸疏図解と他書の附図】

陸疏図解 草部「采芣苢」	『三才図会』 草木卷一「車前子」
	
陸疏図解 草部「食野之苳」	『新校正本草綱目』附図 湿草類「白艾」
	
陸疏図解 獸部「麟之趾」	『和漢三才図会』 獸部「麟」
	

〈出典〉淵在寛述『陸氏草木鳥獸虫魚疏図解』安永八年（1779）刊本（斯道文庫蔵ホ 123/262/5）
 王圻 編『三才図会』上海図書館蔵王思義校正本（上海：上海古籍出版社、1988年影印）
 李時珍編・稻生若水校『本草綱目』正徳四年（1714）刊本（慶應義塾大学蔵 16/67）
 寺島良安編『和漢三才図会』正徳五年（1715）刊本（慶應義塾大学蔵 115/12）

毛詩品物圖攷七卷

和大 三冊

岡〔魯庵〕〔元鳳〕撰 橘國雄畫

天明五年（一七八五） 京・北村四郎兵衛等刊

浅葱色雲文繫地唐草文空押表紙（二十六・三×十八・五糧）、
左肩に刷題簽「毛詩品物圖攷」〔某部〕〔幾之幾〕を貼
付す。

見返「岡公翼先生纂輯」／毛詩品物圖攷／（低一格）〔書坊

〔平安杏林軒／浪華五車堂〕全梓〕あり。

「詩經品物圖攷序」（天明五年、柴〔野栗山〕）

「毛詩品物圖考序」（天明四年、那波〔魯堂〕）

「毛詩品物圖攷序」（天明四年、岡元鳳）

「毛詩品物圖攷目錄」

卷首題及び本文初行「毛詩品物圖攷卷一（隔二格）浪華岡元
鳳纂輯／（低一格）草部／（低二格）參差荇菜（アサ、）／
傳荇接余也集傳根生水」

単辺（十九・三×十三・五糧）、無界、每半葉約十五行二十
二字前後。漢文。読点・返点・送仮名・連合符あり。
概ね各篇に図を付す。

版心、白口單黒魚尾、版心題「品物圖攷」。

末尾に跋文「自言說詩而辨闕名物者亡慮數十家／而其義叢
學者鮮折衷矣梁有毛／詩圖三卷：／／吾／日本嘗有稻若水
先生者自寫多識之／學始有小淺之撰徒相續有纂述未／見圖書
其形狀者也友人岡公翼有慨于／茲說詩之暇遍索五方親詳名物
使畫／人橘國雄寫其圖狀系以辨說：／／天明甲辰孟冬之吉浪
速木孔恭識」（天明四年、木〔村〕孔恭）あり。

奥付「天明五年乙巳春發／（以下低五格）畫工 浪華 挹芳

齋國雄／剗刷 平安 〔大森喜兵衛／山本長左衛門〕／書林

〔浪華 大野木市兵衛／江戸 須原茂兵衛／浪華 衡文佐

／平安 北村四郎兵衛〕あり。

『毛詩品物圖攷』（以下、図攷）は、陸疏図解本よりもさらに
伝本が多い。今回は慶應義塾大学蔵の三本（二〇〇五／三二五
／三、一六一／三三／一、一七五／三三）、国会図書館（特一
／三二七、一二三・三／〇四一七m／〇）を調査し、いずれも
同版と判断した。右に挙げた天明五年の奥付のある伝本以外に、
「寺町通本能寺前／皇都 錢屋惣四郎」という奥付を有
する本（慶應義塾大学 K／四九九／Ok）や、「大阪松邨

九兵衛蔵板」としてその他九軒の書誌が名を連ねた奥付を有する本（国会図書館 特二七九／二八二）など覆刻とみられる版の存在を確認しているが、これらについては現時点では未調査である。本論ではひとまず天明五年版に拠る

撰者は岡魯庵（一七三七―一七八七）、名は元鳳、字は公翼。大坂の人。医師を生業とし、自邸の庭に小園を設け、薬草を雑植したという。³⁶

図攷の構成は草部九十一篇、木部五十七篇、鳥部四十一篇、獸部二十四篇、虫部二十三篇、魚部十六篇、総じて二五二篇から成る。本文は漢文、篇題の下にカタカナで和名を挙げ、図を附す。そのうち、図のない篇は四十一篇である。紙面の体裁は陸疏図解本とはほぼ同様であるが、図は大坂の絵師・橋（挹芳齋）国雄によつて精密に描かれており、陸疏図解本のように各書から転用したものではない。これは、陸疏図解本やその他『和漢三才図会』などの図を転用してきた図解本とは大きな違いである。また、引書について陸疏図解本同様、五類に分類すると以下のようになる。

（Ⅰ）『詩経』注釈書：〔毛〕伝、〔鄭〕箋、孔疏、集伝、呂〔氏家塾説詩〕記、嚴緝（嚴粲『詩緝』）、説約

（Ⅱ）本草書：本草綱目（本草図経、別録、陶弘景、陳蔵器、寇宗奭、李時珍）、大和本草

（Ⅲ）辞書・百科全書：爾雅、急就篇、説文、埤雅、広雅、通雅、爾雅翼、通志略（昆虫草木略）、禽经、古今注、〔六家詩〕名物疏、正字通、字彙、群芳譜、陳湜子花鏡、稻氏（稻生若水『詩経小識』か）、〔詩経名物〕辨解（江氏）、物類品鑑

（Ⅳ）その他典籍：書註、易伝、焦氏易林、礼記鄭玄注、六经、易緯通卦驗玄図、左伝、韋昭（国語）、漢書註、三国志、管子註、莊子、韓非子、淮南子、顔氏家訓、西陽雜俎、四時纂要、致富全書、裴氏新書、楚辭、謝安、謝靈運賦、柳宗元、高啓詩、典籍便覧、楊升菴文集、五雜俎、因樹屋書影、潛室陳氏

（Ⅴ）陸疏・毛晋広要

（Ⅰ） 『詩経』注釈書	（Ⅱ） 本草書	（Ⅲ） 辞書・百科全書	（Ⅳ） その他典籍	（Ⅴ） 陸疏・広要
一三〇	二五	八九	三三三	三九

図攷の引書は（Ⅰ）『詩経』注釈書が突出して多い。そのうち、毛伝と朱注の両方を引く篇が一二七篇あり、古注・新注両者が考証の基礎となっていることがわかる。次に多いのが（Ⅲ）辞書・百科全書の類であり、陸疏図解本では最も多かった（Ⅱ）

本草が最も少ない。また、国書・国人の引用が陸疏図解本では一九九篇中三十八篇あるのに対し、図攷は二五二篇中十八篇にとどまる。

つまり、和漢の書物から図を転用した陸疏図解本に比べると、³⁸図攷は国人の絵師が描いた精緻な図を用いた点では、よりオリジナリティの高い図解本といえる。³⁹その一方で、引書からすれば、図攷の解説は『詩経』の注釈書に依拠しており、モノの名を明らかにするという伝統的な名物学・経学的性格を見て取ることができる。

おわりに

以上、日本で出版された陸璣撰『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』について、和刻本と図解本から概観した。元禄十一年（一六九八）に刊行された和刻本は、日本で出版された名物学の書として最初に属するものであり、⁴⁰そのテキストは、唐刊本の中でも初期に属する説郭・普秘笈本に極めて近い。その後、安永八年（一七七九）に刊行された図解本は、毛晋広要本の本文を底本とし、和文の解説および附図には本草書や百科全書が多く引用されて

いる。

中国の『詩経』図解本について、原田氏の説を引いて科挙の参考書の側面があったと述べたが、科挙制度のない日本の図解本にその用途が期待されたとは考えにくい。日本で刊行された陸疏は、ともに『詩経』の名物について解説した経書の名物解であるが、和刻本に加点した松下見林は医学を生業とした市井の学者である。図解本に注した淵景山も貝原益軒など本草書を多用していることから、やはり医学・本草学を修めた人物ではないかと推測される。また、図攷について、引書の傾向から陸疏図解本よりも経学的色彩が強く見て取れるが、撰者の岡魯庵は医者であり、跋文を書いた木村孔恭は特に本草学や物産学に精通した人物であることから、やはり図攷の出版にも本草学分野からの関心が背景にあるといえよう。つまり、日本における陸疏は、名物学の書であると同時に、本草学の立場から読まれ、⁴¹翻刻されたといえる。

ただ、和刻本は調査しえた本数が少なく、本書がどれほどの影響力を持ったのか追究することができなかった。また、和刻本刊行以前の本書の状況など、現時点では資料不足により不明とせざるをえない。こうした資料不足からか、本書に関する研

究は少なく、その価値を正しく評価する段階に至っていないのが現状である。しかし、本論で紹介した東北大学附属図書館狩野文庫蔵の和刻本は、全体にわたって綿密な注釈が書入れられており、名物の解釈だけでなく、狩野の学問を研究する上でも貴重な資料となり得る一本といえよう。

本論の成果は微々たるものであり、課題は尽きないが、わずかも本書への理解が進めば幸いである。

註

- 1 拙論「陸氏毛詩草木鳥獸虫魚疏の基礎的研究——篇目から見る各本の相違」（『斯道文庫論集』第五十号、二〇一五年）。
- 2 「原本久佚、此本不知何人所輯。大抵從詩正義中錄出。」
- 3 重校説郭本の板木は、明末に刊行された叢書の『唐宋叢書』および『続百川学海』に流用され、清初まで数次にわたって印行されたと考えられる（前掲拙稿および倉田淳之介「『説郭』版本諸説と私見」『東方学報』第二十五卷、一九五四年を参照されたい）。
- 4 森鷗外『渋江抽斎』に次のようにある。「保さんの所蔵の

「抽斎手記」に、『医心方』の出現という語がある。昔から蔵に秘せられていた書か、忽ち目前に出て来た状が、この語で好く表されている。「秘玉突然開櫃出。螢光明徹点瑕無。金龍山畔波濤起。龍口初探是此珠。」これは抽斎の亡妻の兄岡西玄亭が、当時喜を記した詩である。龍口といったのは、『医心方』が若年寄遠藤但馬守胤統の手から躋寿館に交付せられたからであろう。遠藤の上屋敷は辰口の北角であつた。」（岩波書店、一九九九年、一三三頁）

- 5 川瀬一馬「森立之・約之父子」（同著『日本書誌学之研究』講談社、一九七一年）。
- 6 このうち趙佑校正本は後者の案語を附す形式を取るが、書

入れ校語の中に趙佑本を引いたと明らかに分かるものはない。従って、底本が趙佑校正本であつた可能性は低いのではないかと考えている。仮に趙佑校正本であつた場合は、本文のみの抄写ということになる。

- 7 川瀬一馬によると、「渋江抽斎の蔵書は、生前からも立之が借りた儘手許に長く留めておいたものもあつたらしいが、其の没後、三箇月後には見約之をして抽斎の遺書を編目せしめ、合計一千三百七十六部の中、最善本其の他凡て

- 約六百部を抜取った」という（川瀬一馬、前掲論文）。
- 8 藤元直樹「洪江抽斎没後の洪江家と帝国図書館」（『参考書誌研究』第六十号、二〇〇四年）によると、抽斎の二男・矢島玄碩の養子・矢島優善が持ち出して売り払ったらしく、さらに親類の不注意によって日記類が失われたという。また、藤元が掲げる国会図書館蔵洪江家旧蔵書目の中には、約之が参照したと思しき本書の名は見当たらなかった。
- 9 狩野の経歴については青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』（中央公論社、一九九四年、再版）を参照した。東北大学への古書売却の事情も、前掲書の「東北大学狩野文庫」（四二三―四三八頁）に詳しい。
- 10 石田義光「『狩野文庫』攷（一）―狩野文庫へのアプローチ」（『図書館学研究報告』第十七号、一九八四年）。
- 11 羽生紀子「京都・大阪出版メディアの動向―見林・益軒をめぐって」（『武庫川国文』第五十四号、一九九九年）。
- 12 羽生、前掲論文。
- 13 『詩経集註』の跋文には「書肆野田氏新刻詩経集註小本、甚有便出入卷舒也。従余是正文字和訓、及板成加一言于卷末云爾。／西峰松下見林書／元禄六年仲春上丁」（慶應義塾大学蔵 九／五八、句点は筆者）とある。
- 14 前田菊叢（一六七三―一七四四）、江戸時代前期の漢学者。一色氏を称す。名は元成・時棟・範常など。字は子績、号は東溪・菊叢など。京都に生まれ医学を学ぶも、江戸に出て儒者となる。漢籍の和刻本刊行に尽力した（市古貞次ほか編『国書人名辞典』岩波書店、一九九三年―一九九九年）。
- 15 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所、一九六七年）資料編からは、元禄十一年以前にこれらの叢書類が輸入された記録は見出せない。大庭氏が提供した資料は、長崎の公的な貿易に関する記録に限られており、琉球などその他私的な貿易についてはさらなる追跡を要する。なお、大庭（前掲書）の資料編では、『小舶載来書目』満字号の享和元年（一八〇一）に「毛詩草木疏」の名が見える。
- 16 例えば、宋・聶崇義『三礼図』は、江戸の宝暦十一年（一七六一）に菊池南陽の校訂により翻刻されている。
- 17 原田信「『詩経』注釈史における『毛詩学要図』の意義」（『日本中国学会報』第六四集、二〇一二年a）。
- 18 原田信「『詩経』図解本の変遷―宋から明初まで」（『中国

- 文学研究』第三八号、二〇一二年b)。
- 19 原田、前掲論文(二〇一二年a)。
- 20 原田信「詩經大全図」と「詩伝図」―明清期の勅撰『詩經』図解について(『中国文学研究』第三九号、二〇一三年)。
- 21 原田、前掲論文(二〇一二年b)および、同著「清代の『詩經』図解について―前代の継承と改編」(『中国文学研究』第四十一号、二〇一五年)。
- 22 「子曰小子何莫學夫詩。……多識於鳥獸草木之名。」(『孝經・論語集解』校永懷堂本、台北・新興書局有限公司、一九七二年に拠る)
- 23 青木正兒は日本における詩經の名物解について、「此種のものとは却って日本に良書があり、安永年間、淵在寛の「陸氏草木鳥獸虫魚疏図解」五卷、天明年間、岡元鳳の「毛詩品物図考」七卷の如きは、徐鼎の書よりも図が精密で実感が出ている」と評価している(青木正兒『中華名物考』春秋社、一九五九年、十四頁)。
- 24 陸疏図解本は『漢籍国字解全書』第五卷(早稲田大学出版部、一九二六年)に翻刻が収録されている。
- 25 「竊取唐陸璣之詩疏而加焉、已明毛晉之說附焉。以諸本舛
- 26 注此以圖書國字解之、聊爲童蒙塞求耳也。」
- 古典の注釈書は引書中の引書をそのまま引き継ぐため、引書が入れ子状になっている場合が多い。淵注も諸書を引用した末尾に「……ト云何某ガ説ナリ」などとし、どこからどこまでが何某の説(引用)なのか判断がつきにくい。本論では、「某書ニ某書ヲ引キ……」などと文脈上明らかに孫引きと考えられる場合を除き、全て抽出することとした。
- 27 『博物志』や『竹譜』、『禽經』も物事を解説する書としてこの類に入れた。
- 28 引書のない篇は三十二篇である。
- 29 (Ⅲ)辞書・百科全書類と(Ⅳ)その他典籍の漢籍については、毛晋広要からの孫引きである可能性がある。
- 30 『本草綱目』について、武田雅哉氏は「あくまでも『博物学書』の編集が強烈に意図されている」と述べる(武田雅哉「『本草綱目』モノからヒトへ・宇宙の秩序を構築しようとした科学図鑑」『しにか』第七卷第十二号、一九九六年)。
- 31 上野益三『日本博物学史』(講談社、一九八九年)六六一六七頁。
- 32 『三才図会』から転用したことが淵注で明記されている篇

もある。本論ではそれぞれ王圻編『三才図会』上海図書館蔵王思義校正本（上海：上海古籍出版社、一九八八年影印）、寺島良安編『和漢三才図会』正徳五年（一七一五）刊本（慶應義塾大学蔵一一五／一二）、稻生若水校『本草綱目』正徳四年（一七一四）刊本（慶應義塾大学蔵一六／六七）を参照した。『三才図会』は多く本草書に依拠する部分があり（河野敏広『三才図会』草木八巻―十一巻の出典―「証類本草」からの引用）『愛知学院大学教養部紀要』第五十九巻第三・四合併号、二〇一二年）、『和漢三才図会』も凡例で『本草綱目』を参照したことが明記されていることから、『和漢三才図会』では『三才図会』と『本草綱目』がさらに複雑な重層構造を成している。また、『本草綱目』には唐本にも和刻本にも様々な版種があり（渡邊幸三「李時珍の本草綱目とその版本」同著『本草書の研究』武田科学振興財団、一九八七年）、異版同図も存在することから、本論は必ずしも陸疏図解本の図がこの三書を典拠としたというものではない。本論ではどのような書物と共通の内容を持つのかを指摘することが重要と考えるため、図の一致を見るに留め、さらに各書の図の出典を求めることはしな

い。

33 乾隆三十六年（一七七二）に刊行された徐鼎図説と同図が数点見られる。陸疏図解の刊行が安永八年（一七七九）であり、時間的に陸疏図解の図が徐鼎図説に由来したかどうかは分からないが、図の採集元を同じくする可能性はあろう。徐鼎図説は文化五年（一八〇八）に和刻本が刊行されている。

34 附録の図は、主に胡広撰『申学士校正詩經大全』承応二年（一六五三）刊本（慶應義塾大学蔵 一七五／三〇三）の附図と一致する。

35 『隋書』卷三十四・経籍三「靈秀本草圖六卷」や『旧唐書』卷五十九・藝文三「本草圖經七卷」、『宋史』卷二〇七・藝文志六「蘇頌校本草圖經二十卷」など本草の図解本とみられる書名が散見される。

36 『新撰大人名辞典』（平凡社、一九三七―四一年）参照。

37 橘国雄は、宝暦から天明にかけて活動した浮世絵師。大坂の人（浮世絵協会編『原色浮世絵大百科事典』第二巻、大修館書店、一九八二年参照）。

38 図の転写は中国の刊本に限ったものではない。日本の動物

図譜でも珍奇な動物や美しい絵図は転写された（磯野直秀「江戸時代動物図譜における転写」山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』思文閣出版、一九九五年）。

39 図攷は、光緒十二年（一八八六）に『毛詩品物圖考』七卷として上海積山書局から翻刻石印され、近年も簡体字の王承略校点本が二〇〇二年に山東画報出版社から出版されている。

40 上野、前掲書、一四四頁。

41 和刻本のうち、国会本は本草学者の森立之・約之父子から植物学者の伊藤篤太郎の旧蔵であった。